

お薬で起きる

消化性潰瘍について (胃潰瘍・十二指腸潰瘍)

【監修】川西市立総合医療センター 総長 三輪 洋人 先生

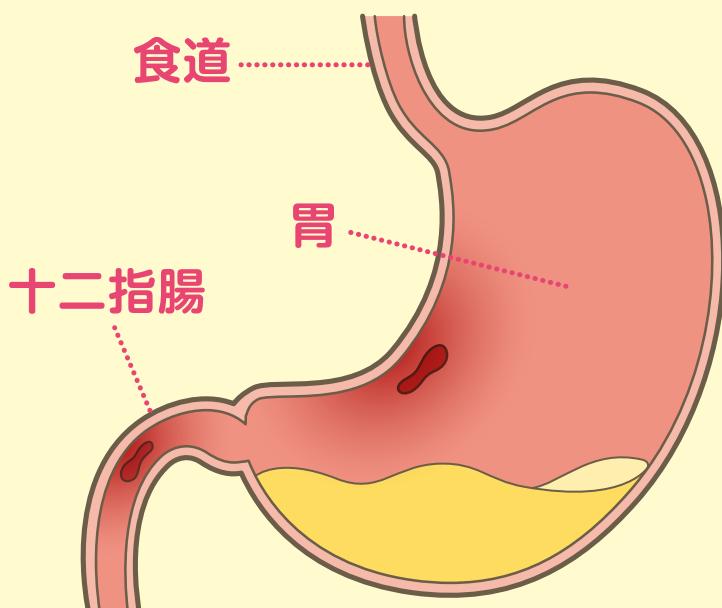


消化性潰瘍とは？

(胃潰瘍・十二指腸潰瘍)

消化性潰瘍は、胃酸や消化酵素が胃や十二指腸の粘膜を傷つけてしまうことによって起きる病気です。傷が浅いと「びらん」、深いと「潰瘍」と呼ばれます。

最近では、**非ステロイド性抗炎症薬**や**低用量アスピリン**などのお薬によって起きる**「薬剤性潰瘍」**も増えています。



症状

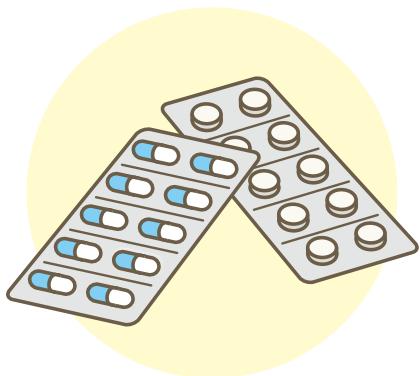
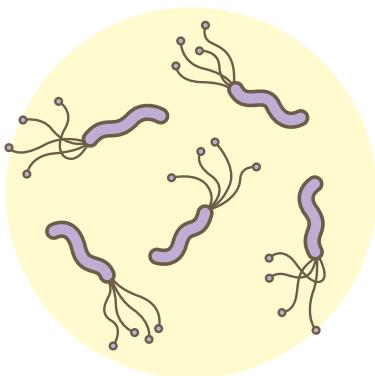
自覚症状で最も多いのが、お腹の上部やみぞおちの痛み(心窓部痛)です。

他に、食欲不振、胸やけ、吐き気、吐血、下血(黒色便)などがあります。



消化性潰瘍の原因

消化性潰瘍の主な原因是、**ピロリ菌(ヘリコバクター・ピロリ)**やお薬の副作用(**非ステロイド性抗炎症薬**や**低用量アスピリン**)といわれています。



その他に、ストレスや喫煙、飲酒などの生活習慣も原因だと考えられています。



お薬による消化性潰瘍

以下のお薬を飲んだ時に、消化性潰瘍（薬剤性潰瘍）が起きることがあります。

非ステロイド性 抗炎症薬

解熱、鎮痛、炎症を抑えることなどに使われるお薬です。

低用量アスピリン

脳卒中や心筋梗塞の再発予防に使われるお薬です。アスピリンも非ステロイド性抗炎症薬の1つです。

非ステロイド性抗炎症薬や低用量アスピリンは、痛みや発熱の原因となる「プロスタグランジン」を作る力を弱めますが、同時に、プロスタグランジンの持つ胃粘膜を保護する力も弱めるため、胃酸によって胃粘膜が荒れ、消化性潰瘍が起きやすくなります。

非ステロイド性
抗炎症薬

低用量
アスピリン

プロスタグランジンの産生を抑制

痛み・発熱を抑える

胃粘膜が荒れる

消化性潰瘍
(薬剤性潰瘍)

検査方法

内視鏡検査やX線造影検査で
潰瘍があるかを確認します。



治療方法

消化性潰瘍の基本的な治療は内服薬による治療です。胃酸の分泌を抑えるお薬(プロトンポンプ阻害薬、P-CAB)や胃粘膜を保護するお薬(プロスタグラランジン製剤)が用いられます。通常はお薬を飲み始めてから6~8週間で治癒します。

■ お薬による消化性潰瘍の場合

消化性潰瘍がお薬によるものと考えられる場合は、現在出されているお薬に加えて消化性潰瘍のお薬と一緒に飲むことや、今飲んでいるお薬を一旦止めるなどが必要となる場合があります。治療の際には医師とよく相談しましょう。

ピロリ菌が見つかった場合は、適切なタイミングで除菌治療を受けることをおすすめします。吐血や穿孔(潰瘍が深くなって胃や十二指腸の壁に穴があいてしまうこと)がある場合は、内視鏡を使った処置や手術が必要な場合があります。

消化性潰瘍と診断されたら…

消化性潰瘍と診断されたら以下のことに気をつけましょう。

① 処方されたお薬をきちんと服用する

② 生活習慣に注意する

喫煙、過度の飲酒、睡眠不足、強いストレスなどは消化性潰瘍が悪化する原因になります。生活習慣にも十分に注意しましょう。

③ 合併症に注意する

潰瘍から多量に出血すると、吐血や下血(黒色便)のほか、めまいや動悸といった貧血症状があらわれます。また、穿孔があると激しい腹痛を感じます。このような症状が出たときはすぐに医療機関を受診するようにしましょう。

医療機関・薬局名